熊日1964.04.05

# 水俣病に考える（5）

## 温泉療法

不治といわれた水俣病に、ひとすじの光りを与えた別府の温泉療法を、くわしく紹介しよう。

水俣病の治療はまったくむずかしい問題だった。第一、決め手がない。長い間にわたって大量に投与されたビタミン剤も、解毒剤も一時的にはきいたようだったが、患者の手足のマヒは依然残り、元のからだになるにはほど遠い。医学界も力べに突き当たっていた。

「ひとつ温泉治療をやってみるか」。そんな時が別府市にある九大温泉治療学研究所と地元の水俣市、同市立病院三者の間で持ち上がり、具体化したのは昨年の八月のことだった。

「お湯につかってなおるような病気なら、もうとっくになおっとるはずじゃ」と、地元では患者も含めてその効果には大して期待は持たなかった。ところが、これがきいたのである。

温泉には昔からいろんな話が残っている。行きはツエにすがって行った人が、帰りにはそのツエはいらなくなって温泉に立ててくる（杖立）など。それほどではなかったが、九大温研で治療を受けた患者四人もわずか二カ月で、帰るときはウソみたいに病状は軽くなくといわれる食塩重ソウ含有泉をガブ飲みする"飲泉療法"❸そしてマヒした筋肉の機能を回復させるための"リハビリテーション訓練"――のほぼ三つ。もともと温泉がいろんな病気にきくことは広く知られている。アメリカやヨーロッパでは温泉といえば病気の治療が中心で、日本みたいにドンチャン騒ぎをやるところにはなっていない。

学理的にも温泉にコロイド（微粒子）状になって含まれているイオウ、食塩、重ソウ、ぼうしょう（芒硝）各種泥土といった数十種の成分は、利用のしかたいかんでは非常に効果があがることがわかっている。

温研ではその中のイオウの持つ解毒作用をまず応用した。温研から西北に約二㌔・鉄輪地獄の同温研専用採土場からイオウ分三％を含む泥土が温研内の浴そうに運び込まれた。この泥プロにはいるのがつまり泥浴だ。泥の作用で湯の温度はややぬるく感じられる。それでも四十一度前後で、泥がはいっていなければ熱くて長湯はまずできない。このお湯に入るとイオウが皮膚を通して吸収され、これが体内のSH基（有毒成分と結合して無毒化する作用をするもので、いわば体内に自然にできる解毒剤）を増量、からだをおかしている水銀をどんどん外に出してしまう。泥のせいでぬるく感じられるので患者はこれに十五分から二十分はいる。"微湯長時間浴"という温泉治療の原則にもピッタリのわけだ。これで水銀が出た。ビックリするほど出た。一日の尿に検出されたその最大量は次のとおりだ（単位は千分の一㌘）

Aさん＝初日の淡水入浴後一〇・四。泥浴後の最大は一五二。なんと二十五倍だ。Bさん＝同じく初日一〇・四。泥浴後一九九・八。Cさん＝七五・二が三四八・五。Dさん＝八五が三二五・五。――こういった著効は泥浴をはじめたその日から現われた。患者はウソみたいに気分がさわやかになり、食事もすすんで回復への道を一歩踏み出したのだった。

飲泉のほうは、文字どおり温泉の湯をそのまま飲むやり方。これには近くの的ケ浜温泉（食塩重ソウ含有泉）、と柳温泉（単純泉）の湯が使われ、一日に〇・五四㌘から〇・九㌘（三合から五合）を三回ないし五回に分けて飲んだ。

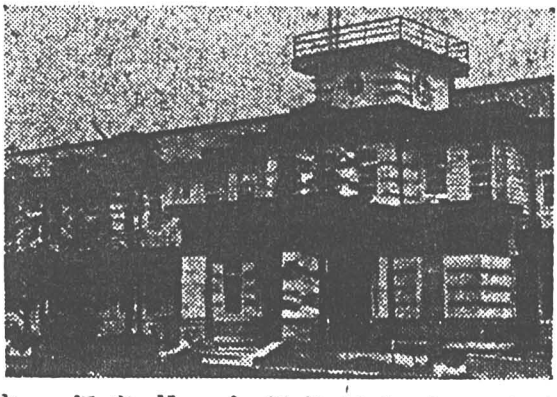
このほうは泥浴ほどの効果はなかったが、それでも一日の尿の中に検出された水銀は、初日の普通のフロにはいったあとの検出量との比較で最大では二、三倍上回った。"泥浴と飲泉"が病状好転のすべての原因とは言えないが、ともかくカベに突き当たった水俣病治療の一つの突破口であった。治療を指揮した温研矢野良一教授も「効果はまったく期待した以上だった」と言っている。

「泥浴」は良くきいた。入浴中の患者たち

## 効果をみてびっくり

## 不治の病に突破口

温研で行なったのは❶イオウ分を含む泥を浴そう（槽）に入れて入浴する"泥浴療法"❷飲料にきして飲ませる"飲泉療法"



別府市鶴見原の九大温泉治療学研究所